
転生、そして・・・

桐生 セイジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生、そして……

【Nコード】

N2248Z

【作者名】

桐生 セイジ

【あらすじ】

ありがちでベタベタな転生物の習作的な何かです。

剣あり、魔法ありありがちな作品にしたいと思ってます。

処女作で拙い文章かとは思いますがお読みいただければ幸いです。

0・0 はじまり的な何か（前書き）

昔作ったゲーム用のプロットをそのまま焼きなおしてみた。類似してる作品が無いと良いなと願う次第。。。 （調べた限りは無かったが。。。）

0・0 はじまり的な何か

最初に虚無があった

初めに神が生まれた

神は言われた「大地よあれ」

神は言われた「空よあれ」

神は言われた「海よあれ」

そして最後に神は言われた「時よあれ」

そして……時は動き出す

どうやら、この世界の神は怠惰だったようだ。

どうやら私は死んでしまったらしい。

らしいというのは、私には死んだ記憶がないからだ。
いや、記憶が無いという事は実は植物状態で死んではいないのかも

しない。

しかし、私がどういう状態なのかはどうでもいい話である。

問題なのは、私には名前をはじめとして”大半の”記憶がないことだ。

あれ？死んだら脳が働かないから記憶は無いのが普通なのか？

まあ、だからといって今のところ不都合がある訳ではない。

少なくとも私は動けないし、すぐに何等かの不都合は生じないだろう……

『眠い……』

そして、私はなぜか無性に眠くなってきた。

なんだ、これは？

選択肢？

『まあ……いいや……』

私の意識は深い眠りへと落ちていった。

0・0 はじまり的な何か（後書き）

実際、ここまでは独創性のかけらもないと思っている。
今後の展開に期待したい。。。。

0・1 独り言的な何か（前書き）

表現って難しい。。。。

0・1 独り言的な何か

私は暗い所でなにやら温かいものに包まれている。

まあ、それはどうでも良い事だったりするのでここでは置いておこう。

幸いな事に考える時間だけは沢山あるようなので、ここで少し私のある世界について整理がてら説明しておこうと思う。

私の今居る世界は、この世界では神々の栄光の世界と呼ばれている。簡単に言ってしまうえば異世界だ。

異世界と言っても、私が前に生きていた世界と根本的な物理法則などは変わらないらしい。

幸いな事に、記憶喪失とはいえ学問的な事は覚えているのでこの世界でも何とかやっていけそうだ。

おっと、忘れてはいけないのがこの世界にはどうやら魔法があるらしい。

まあ、魔法の詳細についてはおいおいやっていく事にしよう。

ここで一番説明しなければいけないのは、なぜ私がここまで知っているかという点だと思う。

どうやら、この世界には、某ゲームのようにスキルのなものやパラメーター的なものがあり、私は先天的なスキルを幾つか保持してい

る。

現在持っているスキルで持っている事がわかるものは、
転生者の大半が持っている「記憶を受け継ぐ者」

思考能力を引き上げる「覚醒」

そして先天的に知識を持っている「賢者」

この3つだ。

やれやれ、覚醒があるとはいえ生まれる前の胎児にとってはかなりの負担に成ってるようだ。

今回はここらで寝るとする・・・か・・・

今回は、前回後回しにした魔法の話をしようか。

この世界の魔法はどうやら『世界を騙す』事により効果が発生させるらしい。

突然『世界を騙す』と言われてもわかりにくいよね？

人がそうだと信じ込めばそれが実現されると表現すればわかりやすいだろうか？

例をあげるならば・・・そうだな・・・一般人を宮廷魔法使いにした
ら『宮廷魔法使いならば凄い魔法が使えるだろう』という期待があ
りるから、『本人に魔法を使用するイメージがあれば』凄い魔法が
使えるといった感じかな？

私もあくまで知識として知っているというだけだから、上手い例え
が出てこないなあ・・・

まあ、本人のイメージの強さ次第で魔法が使えるようになるから、
あまり意味があるとは思えないけどね。

とりあえず、上手い例えは後日への課題という事にしようか。

さて、そろそろ時間のようだね。

私はそろそろ寝る事にするよ。

では、また会おう。

1時間後、とある辺境の町で1人の子供が生まれた。

その子供が今後どのように成長するのか、この時点では知る者はい
ない。。。。。

1・0 誕生的な何か

やあ、また会ったね。

うん、まずは現状を説明しよう。

とりあえず、私は生まれた。

当然の如く0歳児として。

当然の事ながら、自分では動けないし、喋れない。

つまりは、何も出来ないに等しい訳だ。

当然の事ながら、見えるものは観察し、聞けるものは聞き情報収集はしている。

だが、所詮は0歳児の私の回りにあるものなどたかがしれている。

魔法を使って多少は感覚を強化してるとはいえ、当面は出来る事は無さそうだな・・・

「・・・アダムは寝ているのかい？」

「さっき寝たばかりですわ」

おや・・・父が帰ってきたようだ。

せっかくだから両親について簡単に説明しよう。

父親は一応騎士らしい。

まあ、産まれたばかりの乳飲み子の前で、わざわざひけらかしたりもしないだろう。

母親はこれといって仕事をしている訳では無いようだ。

私が産まれたから一時的に子育てに専念しているだけかもしれないが・・・

まあ、美人ではある。

美人に母乳を飲ませて貰っている訳だからある意味ラッキーなのだろう。

母親ではあるが・・・

さて、そろそろ疲れたから失礼するよ。

1・1 日常的な何か(前書き)

土日はおやすみねふ…

1・1 日常的な何か

やあ、元気だったかい？

さて、とりあえず前回より半年たった訳だが、ある程度わかった事を説明しようか。

今は帝国歴13年

つまり建国から13年しかたっていないらしい。

そして、魔法に関してわかった事は1度に1つしか使えないらしい。と言いつつも私は「幻影」と「実体化」の魔法を常時起動しているから、恐らく一般魔法（一般的に使われる魔法だからこう呼ぶ事にした）で適応されるルールだろう。

ああ、あと父の名前がアーウィン・ロレンスで年齢が22歳、母がリデア・ロレンスで18歳らしい。

家があるのは帝都である。

とりあえずこんなものだれうか？

まあ、こんなもので今回は失礼するよ。

1・1 日常的な何か（後書き）

早く学園編まで入りたい…

1・2 発見的な何か

やあ、元気だったかい？

前回から3カ月ぶり、つまり私は7カ月になった訳だ。

そして、色々考えてて気づいたんだ。

私の日頃いる部屋には魔法を使った照明器具が設置されているが、それは入口付近のスイッチらしきものによって管理されているらしい。

まあ、それだけならどうという事は無いんだが、私は気付いたんだ。

どうやら、この世界の魔法には距離が関係ない。

それがどういふ事かと言うと、私が生み出した魔法を使えば私はベツトに寝ながらにして『外の世界を旅出来る』という事だ。

つまり、私が遠隔で人の幻影を生み出し、それに実体として活動出来るものを付与する事で、平たく言えば幽体離脱したものに実体がある状態を生み出す事が出来るという事だ。

そして、魔法を使ってモンスターを倒せば経験値が手に入る・・・これは基本中の基本だ。

上手くいけばチート級の成長が出来るのではないだろうか？

これは試してみる事にしよう

1・3 はじまり？ 的な何か

やあ、久しぶりだね。

といつても前回からほとんど時間がたつてない訳だが・・・

とりあえず、試してみよう。

『幻影』・・・よし上手く発動したようだ。

ベッドの横にぼんやりとした白い固まりが見えている。

あー・・・どのような姿にするか指定しないとダメか。

とりあえず、私が成長して15歳になった位にしておこう。

そう決めた途端白い固まりは銀髪の美少女へと変わっていく。

ああ、説明してなかったかもしれないが、私は自分自身が産まれる前に自分を対象に『幻影』の魔法を掛けた上で『実体化』の魔法を掛けている。

つまり、私は本当は女なのだ。

まあ、ここではあまり関係無い話なので実験の方を進めよう。

次の段階として『実体化』を掛ける。

そして自分自身を抱き上げる。

成功だ

とりあえずベッドへと戻し魔法を解除する。

これで成長を待たなくても冒険が出来る。

あ、何か空間把握系の魔法を使わないと状況がわからないぞ・・・

『遠視』を使えば行けるか？

その辺は実地で試す事にしよう。

モンスターのドロップは、異次元にでも部屋を作って保管すれば良
いか。

使えば使っただけステータスは上がるようだし、がんばろう。

とりあえず、軽く探索に行く事にし、家の外に魔法をさせる。

『遠視』を幻影の目の部分を起点として発動する事で視野を確保し
て、帝都内を散策してみる事にする。

私が済む家は住宅地にあるらしく、周辺にはほとんど人がいない。

まあ、昼だしな・・・

とりあえず、賑やかな方に向かう事にしよう

1・3はじまり?的な何か(後書き)

ちよつとは進んだかな・・・?

1・4 外出的な何か

私はにぎやかな方へ歩を進めた。

どうやら、家の前の通りは大通りに続いているらしい。

(ほう・・・結構広い通りだ。)

恐らく帝都でも大きい通りに入るのだろう、店が立ち並ぶ通りへ出た。

(あれは・・・武器屋か？こっちは宿屋っぽいな)

それぞれ建物の入り口に剣やベツトをあしらったエンブレムが掲げられている。

おそらくそれが各店が何を扱う店であることを示しているのだろう。

(しかし・・・いまの状態では行く必要もないか。)

そう、なにせ今の私はあくまでも魔法でそこにいるように見せかけているだけであり、武器や防具は装備出来ないし、食事や睡眠も必要な状態なのだ。

(しかし、人が多いな・・・とひあえず外にでて魔法でも試すか。)

人が多いと魔法が見破られて面倒な事になるかもしれない、そう考えとりあえず外に出ようとした。

が、しかし・・・

(門はどこだ・・・)

初めて外にでた私には門の位置などわかるはずがなかった。

(あそこで聞いてみるか)

私は目に付いた露店で聞いてみる事にした。

「あの、すみません」

「あいよ、お譲ちゃん何が欲しいんだい？」

「あ、いえ、買い物じゃなくて・・・ちょっと道をお聞きしたいんですが。」

「なんだ、客じゃないのか。で、どこに行きたいんだい？」

「えっと、門の場所なんですけど・・・」

「へ？何を言い出すのかと思えば。門はこの道をまっすぐ行けばあるぜ。」

「あ、そうなんですか。ありがとうございます。」

「なに、良いって事よ。機会があったらうちで買ってっておくれ」

結構気の良いおっさんである・・・頭が禿げあがり光を反射しているのを除けばであるが・・・

1・4 外出的な何か（後書き）

1回の文章量を増やすと、書いたのを即投稿するのはどっちが良い
んだろう・・・

即投稿の方がモチベーションを維持出来るかな？

1・5 捕獲的な何か

私は店の禿おやじに言われた通りを門を指して歩き始めた。

そして私は見つけてしまった・・・

(猫耳・・・?)

そう、通りには巫人と思しき猫耳に猫尻尾の人々があるいて・・・いや、良く見れば尖った耳だったり、毛むくじゃらだったりする人(？)が思い思いに歩いている。

(流石異世界だなあ・・・)

などと思いながらも足は止めない。

そのまま歩く事20分ほど・・・

ようやく門が見えてきた。

(大きい・・・)

そう、門は幅10メートル高さ15メートルほどだろうか？典型的なアーチ型の門である。

まあ、門と言うからには当然見張りの兵士もいるわけだが・・・

(親父か・・・)

そう、門の横の詰め所の前に何やら兵士に指示を出している父親が居た。

ばれる事は無いだろうとそのまま歩を進める。

門を出ようとした瞬間

「おい、そこのちょっと待て」

父親に呼びとめられてしまった。

「ひゃ、ひゃい、なんでひょうか」

噛んだ・・・全力で噛んだ。

「ここで話すのもなんだからちょっと奥まで来てもらおうか」

「え？」

「良いから来い」

腕を掴まれ強引に詰め所の中に引っ張りこまれてしまう。

詰所の中は・・・まあ、男所帯ならではの乱雑さでごちゃごちゃした感じた。

「とりあえず、その辺の椅子にでも座れ」

父は扉を閉め扉が開かないようにであろうか扉に体重を預けている。

（この状態では逃げ出しようがないか。）

当然、魔法の解除をすれば逃げる事は出来るが、何が起きるのかに期待しつつ私は言われた通り椅子に座る事にした。

1・6 サブタイトルと内容の関連って無いよね的な何か

「さて、貴様は何者た？」

腕を組みつついきなり核心を問いかけられた。

「わざわざ、俺の家族の姿をして目の前に現れたのだから理由が無いなんて言ってくれるなよ？」

(するどいな・・・)

「なぜ、気付いたんですか？」

「なぜ？おまえさんには生きている気配が全くないからな。気付かない方が難しいだろ」

「流石お父様ですね」

「は・・・えっ・・・お父様って・・・俺がか？」

「え？気付いたから呼び止めだんじゃ・・・」

「まさか、アダムなのか？」

「正確には使い魔みたいなものですが・・・」

「マジか・・・ちょっと待ってる」

父はそう言つと慌てて外に出て何やら兵士と話している。

待つこと数分

「よし、帰るぞ」

「帰るってどっへ・・・」

「家に決まってるだろう。話しは帰ってからだ。」

こうして私の初めての冒険は1時間弱で幕を閉じたのである。

1・7 もうサブタイトルを付けなくて数字だけで良いんじゃないかの何か

お気に入りか6件・・・

そなたに感謝を

1・7 もうサブタイトルを付けなくて数字だけで良いんじゃないかの何か

そうして、先ほどたどった道の利を父の後ろを付いていく事になったのだ。

歩く事30分ようやく家にたどり着く。

「ただいま」

父が扉を開けて入っていく・・・

(後ろについていけばいいのか?)

私はそのまま付いていく事にした。

「おかえりなさい・・・で、後ろに居るのはどちら様?」

出てきた母は険悪な空気を纏っている。

「えーっとだなあ、どう説明したらいいのか・・・」

「お父様とりあえず、奥の部屋へ」

「ああ、そうだな」

「お父様・・・」

母が凄い形相で睨んで・・・怖い怖い

「リディア、ほら、ちゃんと説明するからとりあえず奥の部屋へ」

父が無理やり母を押して私の寝ている部屋へと押しこんでいる。

さて、すんなりと納得してもらえるものかどうか・・・

「早く説明して頂けないかしら？」

かなりイライラしているのが声を聞いただけでわかる

「少し、落ち付けて・・・えっと説明して貰って良いかな？」

「はい、えーっと・・・簡単に言えば私は使い魔みたいなものです」

「使い魔・・・？」

母はよほど驚いたらしくポカーンと擬音が見えるかと思うほど驚いたようだ。

「はい、私はアダム・ロレンスによって具現化されています。」

「具現化？使い魔なら召喚じゃないのか？」

父にはある程度魔法に関する知識があるらしい。

「正確には、魔法によって生み出した幻影に対し実体化の魔法を掛けてるだけなので使い魔という表現は正しく無いですね。身代りと言った方が正確でしょうか？」

「なるほど、通りで生きている気配が無い訳か」

気配・・・か、確かに生きてる訳じゃないからそれで見分けられるだろうが・・・この父親結構強そうだ。

「逆に聞きたいんですが、なんで私を捕まえたんですか？」

「いやなに、リデアの若い頃に似ていて気配が無いからね・・・刺客かと思ったただけだよ。」

刺客って・・・この親父は日頃何をしているんだろうか・・・

「つまり・・・貴方は私の娘という事で良いのかしら？」

母親は・・・話を理解してたのかわからん。

「良いんじゃないか？本人なら子守を任せても大丈夫だろう。」

うわ、子育てを丸投げしやがったよこの親父

「ふふふ、実は娘も欲しかったのよね！。それでお名前は？」

名前か・・・

「名前は・・・ジョン・スミスとか？」

ジョン・スミスって・・・我ながら適当である。

駄目だこいつ早く何とかしないと、と思ったかはわからないが父も母も何やら頭痛に耐えているようだ・・・そりゃそうだな。

「仕方ないわね、貴方はアメリカ・ロレンス私の遠縁という事にするわ。」

「それが一番だろうな。」

「それはそうとあなた、お仕事は？」

「いや、ほら・・・まあ、なんだアメリカを見つけて引っ張って・・・」

「お仕事は？」

「・・・行つてきます」

うちでは、父より母の方が強いらしい。

そうして、父はとぼとぼと再度仕事に向かったようだ。

「さて、アメリカ歓迎の為に今日は御馳走を作りましょう。子守をよろしくね」

「はい、わかりました」

子守と言っても、自分の子守だからな。きっと大丈夫だと思いたい。

1.7 もうサブタイトルを付けなくて数字だけで良いんじゃないかの何か

あれ・・・土日は休みだったは？・・・

1・8 土日はお休みです的な何か（前書き）

そなたに感謝を

1・8 土日はお休みです的な何か

流石に自分の子守はとても楽しかった。なにせ何をすれば良いかが全てわかる訳だからな。

そして、数時間が経ち夕方

「ただいま」

父が帰って来たようだ。

「おかえりなさい」「」

風呂なんて洒落たものは無いから帰宅後そのまま夕食である。

「今日は奮発して御馳走にしてみましたー」

「おお、御馳走だ」

「え?」「」

私と父のリアクションには天と地ほどの差があった。

夕食は、黒パンに、具が沢山入ったスープ、それと少々のはムという構成である。

「ふふふ、凄い御馳走でしょ?」「」

「そう・・・ですね」「」

現代日本の感覚を持つ私には返す言葉も無い。さっさと食べてしま
うでしょう。

そして、食後

「さて、今後の事についてだがアメリカはどうしたい？」

「えっと、冒険に出たいなと思ってます。魔法も使えますし・・・」

「うーん・・・なら学校に行ってみるのはどうだい？」

「学校？学校ってお金が掛るんじゃない？」

「一応、王立学園なら魔法が使えるればお金は掛らないみたいだし、
受けるだけ受けて見たらどうだ？」

「あなた、その前に居住者として登録しないといけないんじゃない
？」

「ああ、そうかそうすると明日は居住者として登録してついでに学
園に関する事も調べてるか。それでいいか？」

「あ、はい・・・」

そうして夜は更けて行き、翌日に居住者登録（戸籍のようなもの）
と学園の受験の手続きをする事になったのである。

1・9 多分分かれ道になる話しの前夜の何か(前書き)

そなたに感謝を

1・9 多分分かれ道になる話しの前夜の何か

そして、翌日である。

前日の夕食がいかに豪華だったのかがわかった。

朝食は黒パンと野菜スープ（塩未使用）だったのである。

まあ、いきなり聞くのも気が引けるから、他と比べてみてから聞く事にしよう。

特に問題も無く食事が終わり、予定通りに登録へ行く事になった。

「ちよちよつと名前を書くだけだから」

と言うのは父の表現であるが、登録自体は簡単らしい。

私は父に連れられて役所に向かう、その道中に父が役所について簡単な説明をしてくれた。

役所というのは複数のギルドや国の機関の窓口が集まった合同庁舎のようなものらしい。

ただし、冒険者ギルドだけは国際機関（？）で単独であるらしい。

そんな話を聞いてるうちに役所に着いたようだ。

役所の扉は開け放たれているためそのまま中に入っていく。

「居住者登録はここで良いのかい？」

「はい、居住者登録ですね？登録は・・・」

「登録はこいつで保証人は俺だ」

「それではこちらの用紙に必要な事項をご記入ください。それとカードの提示をお願いします。」

父が受付と話している間に私は用紙を記入することにした。

名前・・・アメリカ・ロレンス

年齢・・・15歳

性別・・・女

居住・・・保証人に同じ

こんなものだろう。

書いたものを父に渡すと保証人の欄に名前を書きそのまま窓口へ出す。

そして、待つこと数分

「お待たせしました、こちらが登録カードになります。内容を確認頂いて記載内容に間違いがなければ、捺印をお願いします。」

特に問題が無さそうなので捺印する。

簡単な説明を受けたが、どうやらこのカードは汎用で色々な機能があるとの事だ。

機能の追加は各ギルドで出来るから追加した時に詳細説明を聞けという事らしい。

「そういえば、学園の試験に関してはここで確認できるのか？」

「確認出来ませんが、多分直接学園に行つて確認した方が早いですよ。」

「やっぱりそうか・・・なら直接行く事にするよ。」

「あ、学園に行かれるなら紹介状をお書きしますね。」

そうして、紹介状を手に入れ王立学園へ向かうことになった。

1・9 多分分かれ道になる話しの前夜の何か（後書き）

どのように進めるか悩む今日この頃

学者が冒険者、あるいは他の進路か・・・

1・10 2・0になんて為らない的な何か

王立学園では何事も無く受験要項を聞くことが出来た。

入学試験は小論文と魔法の実技によって行われるらしい。

まあ、勉強に関してはどうするかは今後の課題にしよう・・・と私は気付いてしまった

魔力が足りない

イメージが魔法であるというこの世界では魔力が足りないというのはおかしいと思うだろう。

通常の魔法はよくわからない何かを消費して魔法を発動するという『一般的なイメージ』の元に構成されている。

そして、この世界では訳のわからない何かを魔力として定義されている。

一般的なイメージがあるというのは例えるならば道を歩くようなもので、何も無い状態の荒野をあるく（自力で魔法を起動する）よりは圧倒的に楽なのだ。

そして私も面倒だから一般的な魔法を使い『今の体』を構成している。

一般的な法則に従って構成している以上、魔力が無くなれば他から持ってくるか一旦解除して回復を待たねばならないのだ。

(ごじしよつか・・・)

私は『とりあえず』空間に漂う魔力を吸収する事にし、問題を先伸ばしすることにした。

1・i・0 2・oになんて為らない的な何か(後書き)

とりあえずこれぞ・・・orz

1・11 そうだ樹海へ行くの的な何か。

「・・・という事で俺は仕事に行くから」

「え？」

のこり魔力の事を気にしていてどうやら父が話していたのを聞き逃したらしい。

「ほら、俺は仕事に行かなきゃいけないからアメリカはどうする？
って話だよ」

「えーっと・・・私はちょっと散歩でもして帰ります」

魔力が満ちてる場所を探さないといけないからね。

「そうか、じゃあ夕飯までには帰るんだぞ」

父はそう言つと中央に向けて歩いて行ってしまった。

それで良いんだろうか・・・？

まあ、考えても仕方ないしとりあえず、街の外に出る事にしよう。

昨日とは違いすんなりと外に出る事が出来た。

まあ、父が居ないなら当然か。

とりあえず・・・冒険者でも捕まえてこの辺の地理を聞くか？

ああ、そんな事する前に魔法で周辺のマップが見れるんじゃないかな？

試してみるか・・・『周辺探索』

おお、見れる、見れるぞ！縮小縮小と・・・

どうやら東の方が魔力が濃そうだな行ってみよう。

『飛行』

まあ、飛べばすぐに着くでしょう

飛んで行ったらそこは火山でした。

火山の麓に小さな都市があったのでとりあえずそこに行って情報収集をしよう。

街の手前で飛行を解除し歩いて向かう。

帝都の外郭都市であるからか城壁と城門はそれなりに立派だった。

有事の時は最終防衛ラインになるのだから当然といえば当然の

事であるが。

情報収集は・・・まず冒険者ギルドへ行こう！

そして探す事十数分意外と簡単に見つける事が出来た。

そういえば、帝都では冒険者ギルドに行かなかったから初の冒険者ギルド行きという事になる。

1・11 そうだ樹海へ行くところなのか。(後書き)

展開が無茶苦茶になりつつある今日この頃

1・12 早くもネタ切れのな何か(前書き)

そなたに感謝を

1・12 早くもネタ切れの奈何か

どきどきわくわくしながら扉を開くとそこは……

ただの受付だった

イメージ的には銀行を木造で作った感じだろうか？

入ってすぐの所に受付があり、恐らくこの受付で各窓口に振り分け
ていくのだろう。

窓口にはそれぞれ衝立のようなものがあり、一応プライバシー（？）
が保たれてるという所だろうか？

とりあえず受付に行ってみよう。

「本日はどういった御用件でしょうか？」

「登録したいんですが」

「えーっと……そうですね、3番窓口へどうぞ」

3番窓口ね……

「新規登録ですね？居住証明はお持ちでしょうか？」

「あ、はい」

今日取ったばかりの証明書を渡す。

「では、登録の説明をさせていただきます」

まあ、面倒なので要約しよう。

冒険者登録は2種類あるらしい。

具体的には本格的に冒険者をやる人向けの1種と、副業として冒険者をやる2種で、1種は各種特典を受けられるがノルマが決められているが、2種はノルマが無い代わりに特典が無いらしい。

という事で私はとりあえず2種にすることにした。

「では、登録しますので少々おまち下さい。その間にこの書類をお読みになってサインをお願いします。あと、こちらのギルドの制度に関しての冊子をお渡ししますので目を通して置いて下さい。」

と、書類を渡される

内容は・・・よくありがちな問題があったら自己責任で解決すること云々・・・とりあえずサインしました

そして冊子の方を読むと、仕事の斡旋とランクに関して主に書いてあり、おまけ程度に本部支部の扱いなどが書いてあるだけのようだ。

こちらも要約すると、仕事は各内容毎にポイントが振られており、ポイントの多さがギルドに対する貢献度を表す（これは主に1種のノルマに関連するものらしい）また、それとは別に各人の能力に対してのランク付けがされており、このランクによって受けられる仕

事の難易度が変わるようだ。

「それでは、登録の方が終わりましたので居住者証明の方をお返します。アメリカさんの前途に幸がおおからん事を・・・」

さて、登録も終わったようだし、張り切って魔力の回収に行きますか！

1・13 結構無茶な展開だと思いつつ無理矢理書いた的な何か (前書き)

そなたに感謝を

1・13 結構無茶な展開だと思いつつ無理矢理書いた的な何か

ギルドに登録出来たので予定通り魔力の強い所へ行ってみよう。

確か山の辺りが濃かったから山へ向かってみよう。

山のふもとに辿り着くと洞窟と小屋があった。

そして道中結構な冒険者らしき人とすれ違う・・・ここに何かあるのだろうか？

とりあえず、小屋の前に立ってる人に聞いてみるか

「あの、すみません。」

「どうしたお嬢ちゃん道にでも迷ったのか？ミマイズの街ならここから南東の方に・・・」

「いえ、そうじゃなくて」

「なら帝都かい？帝都ならここから東」

「そうじゃなくて、ここは何なんですか？」

「なんなんですかって・・・ああ、ここはダンジョンだ」

「ダンジョン？」

「ああ、迷宮という呼ばれ方もするがな、一応ここはドラゴンが守護するダンジョンって事で有名だ。まあ、ドラゴンと言っても意図疎通が出来るからそれほど危険な存在じゃないがな」

意思疎通？会話でも出来るんだろっか？でもそもそも・・・

「ドラゴンって・・・」

「ん？ドラゴンを見たいのかい？」

「どちらかと言えば・・・見たいですけど・・・」

「そっかそっか、ちょっと待ってな」

と言って何やら小屋の中に入っていく男

待つ事数分

「待たせたな、じゃあちよっくら見に行こうか」

・・・仕方ないついていく事にしよう

移動中に男が簡単にドラゴンについて説明してくれた

ありきたりではあるが、地上最強の生物であるという事しかわからない

あと珍しかったのは移動中にモンスターが出現した時である。

「おっと」

男が急に立ち止まる

目の前には狼のようなモンスターが2体

「嬢ちゃんちょっと下がってな」

私の前に目隠しをするように立ち何やら呪文を唱えている・・・すると

狼のようなモンスターが光を放ち消えてしまった。

「え？いま何が・・・」

「なに、邪魔だったからちよっと隣の通路に飛ばしてやっただけさ」

どうやら、強制的に移転させたらしい・・・もしかしてこれは色々使えるんじゃないだろうか？暇がある時にでも研究してみようと思っただけで終わった。

それ以外は特に何事も無く進み大きな扉の前へ辿り着いた。

1・13 結構無茶な展開だと思いつつ無理矢理書いた的な何か (後書き)

アイディアはあるんです。ただ文章に出来ないだけなんです

1・14 迷走し過ぎ的な何か（前書き）

そなたに感謝を

1・14 迷走し過ぎ的な何か

扉を開けて入るとそこは火口だった

ダンジョンと言われた洞窟をまっすぐ来ただけに火口だった

まあ、それは重要な事ではないのでおいておこう

活火山である事を示すかのように広がった溶岩湖の中にぽつんと頭を出した巨大な岩の上にそれはいた・・・ドラゴンである。

男の説明によるとこのドラゴンはこのダンジョンの主らしい

たしか、このドラゴンは意思疎通が出来ると言っていた気がするが・・・まあ、とりあえずはどうでも良い事である。

この場所は魔力がとても濃いから魔力の補充をするのはここが最適だろう。

男に見つからないように、転移用の目印を付ける・・・なんかドラゴンがこっちを見てる気がするがキニシナイキニシナイ

とりあえず男に付き添われダンジョンの外まで出る

「おじさんありがとう」

「おじさ・・・」

あ、なんか落ち込んでる

「まあ、いい。気おつけて帰れよ」

よし、家に帰ろう・・・あ、その前に帝都の冒険者ギルドを覗いてみようかな？

そして、私は自宅へと転移する事にした・・・え？目印がないって？ほら、自宅には本体（？）があるから大丈夫なんだよ

そして、自宅に帰って見たらまだ夕食には早い時間だったようなので、私は散歩がてらまだ見ぬ帝都の冒険者ギルドに行ってみる事にしました。

そして道中特に何もなく（いや、何かあるのが問題であって普通は何もないからね）無事に到着中に入ってみる。

やっぱり、外郭都市と違って規模は大きかっただが特に目新しいものは・・・あった、なんか壁際に機械が並んでいる。

どこかに説明書きが・・・なるほど、自動売買機か

一部の大量かつ簡単に手に入る素材系はこの機械で扱っているらしい特に機械に用事は無いので依頼の張り出している掲示板を見る・・・やっぱり素材収集の依頼は多いな。

とりあえず、それだけを確認し今日は家に帰る事にした。

1・14 迷走し過ぎ的な何か（後書き）

裏設定1

何かの魔法に移転の魔法を掛けると魔力を心太のように押しだして
いく為消費魔力は少なくて済む

どうかけば良いのかを悩む今日この頃

1・15 転進通称撤退的な何か(前書き)

そなたに感謝を

1・15 転進通称撤退的な何か

そして、両親が寝静まった夜中私は始める事にした。

始めると言っても悪い事じゃないよ(多分)

とりあえず、昼間印を付けた所に移動しよう。流石に夜中は誰もいないはずだ。

そして私は転移した。まあ、昼間来た時と特に変わる事も無く魔力が満ちている・・・よし、回収しよう

『おい、貴様』

え・・・今どこからか呼ばれた

『ここに何しに来た？』

そんなの、魔力を回収しに来たに決まって・・・

『ここを私の領域と知ってるの事か？』

ん？私の領域・・・？そういえばここってドラゴンが居たよう・・・

『ふん・・・無視するとはいい度胸だ』

いや、無視したんじゃないわ忘れてただ 『なおわるいわ』 です
よねー

『今すぐ出て行けさもなくば力づくでも排除する』

力づく……ならば見せて貰おうかドラゴンの実力とやらを

『ほざけ、小娘』

ドラゴンが魔力を練り上げている

やはり、ドラゴンもこの世界の一部なのだ

だが、この世界の生物であるドラゴンに対してなら私は……

1・15 転進通称撤退的な何か（後書き）

どうしてこうなった

というか、場面の説明が少なすぎる気がする今日この頃

1・16 火力制圧的な何か（前書き）

そなたに感謝を

1・16 火力制圧的な何か

まずは”普通”に相手をすることにしよう。

周囲の魔力濃度を生かし魔方陣の多重起動を行う。

魔方陣を簡単に説明するなら、魔法的な力を持つと信じられている図形を組み合わせたものである。

それを空中に投影するとそれっぽくて見栄えが良くなるのと、そこを起点として魔法を発動することが出来る。まあ、実際は無くても出来るが気分的な問題だな・・・うん

とりあえずドラゴン相手だから・・・『氷の矢』を200本くらいでいいかな？

という訳で放ってみました。

「氷の矢200連弾」

小手調べに氷属性の魔法で攻撃してみる。

『ふはは、ぬるいぞ小娘』

ドラゴンは平気な顔をしている
アメリカは怒った

「氷の矢300連弾」

『炎の障壁、炎の矢100連弾』

「氷の障壁、氷の矢400連弾」

こうして撃ち合うこと数分その時は突然訪れた。

『やるではないか小娘、その力に敬意を表して私の実力をみせて「対消滅」やる・・・う・・・』

とりあえず、私は魔法によって”物質の対消滅”を発生させた。

原理は簡単、指定した場所に反物質を召喚するだけのお手軽魔法・・・
うん、これは威力がヤバイから封印すべきだな

一撃で火口の溶岩の8割りを消滅させた魔法にドラゴンも言葉がな
いようだ

「で、まだやるの？」

この一言がドラゴンへ突きつける最後通告であった

1・17 終結(前書き)

そなたに感謝を

私の一言でドラゴンは動きを封じられたように静止してしまった。

私がやったことは召喚によってマイナスの質量を持つ物質を引っ張ってきただけである。

そして、その分の質量が相殺され消えただけであり、理論を知っていれば驚くに値しないだろう。

当然ドラゴンはこういったことを知らないだろうから驚くのは予想していたが・・・驚きすぎじゃないか？

『なぜ・・・どうやって・・・』

「別に強い力で吹き飛ばしたただだから驚く事じゃない」そういう問題ではない！」

ん？一体何が問題だというんだらう

『ここは我が暴れても良いように魔法では破壊出来ないように作られているのだ・・・それを吹き飛ばすだと？』

「ふーん、なら私の言いたい事はわかるよね？貴方はどうするの？」

『・・・軍門に下ろす』

「なら、貴方を使い魔にするわ」

『なっ・・・』

「何か？」

『・・・』

こうして、私はドラゴンを使い魔とする事になりました。

1・17 終結（後書き）

あけましておめでとございます。

ようやく使い魔のくだりまで書けましたが、ここまでで実質1話分の文章量しかないという事で。。。

今後加筆をする予定ではありませんが（むしろ、これはあらずじか下書きに近いから全面的な書きなおしかもしれませんが・・・）
気長にお待ちいただけると幸いです。

読んでくださってる方が居ればの話ですが・・・

2・00 学園へ行くための何か(前書き)

そなたに感謝を

2・00 学園へ行くための何か

ドラゴンを使い魔にしてから2週間後が経ちました

ついに王立学園の入学試験です

ああ、学園の正式名称はネブラ王立総合魔法科学園というらしいです。

ちなみに魔法科、学園ではなく魔法、科学、園という事らしいです。魔法だけじゃなくて科学も扱ってるという事は前世の科学技術を持つ私にとってはうれしい事です。

入学試験は面接と実技だけで、その中で学園に在籍する教員の誰かが自分の教室に所属させてくれれば合格という事ですが・・・結構基準が曖昧ですね。

特に試験の順番は決まっていらないので、最後の方にゆっくり行きましようかね。

人ごみは嫌いですから・・・

所変わって王立学園の試験室

「はてさて、今年の当たりはこんなもんですかな」

「そうでしょうね。先ほどから、魔法詠唱に失敗するのやら機械を持ち出すのやら……」

この世界では科学技術が発展しておらず、すべてのものが1品物の状態である。共通規格という概念を持たない世界であるから機械類の精度が低く評価が低い、それに反比例するように魔法の評価が高くなっているのが現状である。

「このまま、ここに居ても時間の無駄でしょうから私はそろそろ退き出させていただきましょうかな」

「だいぶ空席も目立ってきましたし今年もそろそろ終わりの時間ですからな」

例年、自信があるものは早く受けようとするため後半はグダグダになる。そのため後半になると自信の研究室に引き上げる教員が多くおり、そのためそれなりの力を持つものは早く受けるといふ悪循環が発生している。

「いまさら、戻ってもやれる事は無いですから私は最後まで見えますよ」

「はっはっは、クラウド殿も物好きですな、では私はお先に失礼させてもらいますよ」

そういつて男は出て行った。

クラウドと呼ばれた男は前に視線を戻す

前方では次々と試験者が変わっていく、後半であるからか科学系の

教員が採用する割合が高い。

(面白い見世物ではあるが・・・なあ)

そこで、クラウドは衝撃的な出会いを果たすこととなる事などこの
時点では誰も知らなかった

2・01 試験的な何か（前書き）

そなたに感謝を

2・01 試験的な何か

試験会場まで来たものの私は悩んでいた

(試験で何をやればいいんだろう・・・)

『主よ、私と出会った時にやったあれで良いのではないか?』

(あれはちよつとね・・・)

流石に反物質を召喚しての対消滅なんて派手さも無いし落とされるだけだと思っただよ

『派手では無いがわかる者にはわかるのではないか?』

(それはそうだけど・・・)

『逆にそれも理解出来ないような奴の下で学ぶ必要もあるまい』

(それもそうか・・・)

こうして私は試験で反物質の召喚を行うことにして、消滅させる石を持って学園へと向かった。

「順番になったら呼ぶのでこちらでまつように」

案内された控室では3人ほど試験の順番を待っていた。

そして、試験会場であると思われる部屋に入っていく2〜3分で次の人が呼ばれ入っていく

そして待つこと10分

「アメリカ・ロレンス」

ついに呼ばれた

「君で最後だ、精々頑張りたまえ」

なんとなく嫌な感じである。

しかし、係員に腹を立てても仕方ないので気を取り直して試験に臨もう。

「アメリカ・ロレンス この石を破壊します」

(しかし、試験官が少ない・・・なんでだろう?)

私はそんな事を思いつつもとりあえず、石を破壊する事にした

「来たれ」

召喚魔法を使い石に反物質をぶつける。特に周りに被害を及ぼす事無く消滅させる事が出来た。会心の出来である。

「.....」

だがしかし、試験会場は沈黙に包まれている、
いったい何がどうしたというのだろうか？

2・02 試験官は見た的な何か（前書き）

そなたに感謝を

2・02 試験官は見た的な何か

「……」

試験会場は沈黙につつまれている。

（なんだあれは、ただの手品じゃないか）

そう、石を消したのには大きな魔力変動が無く魔法によって石を消滅させたようには見えなかったのだ。

そして沈黙しつつも退出の準備をしているのがちらほら。

つまり、この学生は不合格とみなされたのだ

（まあ、この程度じゃな……）

そのとき

「うちで引き受けよう」

（誰だ！！）

その一言によって会場はざわめきに包まれた

そう、あれは奇跡だった

おそらく科学系クラスの教員には何があったかわからなかっただろう

召喚術自体は一般的に行われる事だ

だが、それは意思を持つ相手に呼びかけを行い、その呼びかけ応じたものをその場に呼び出すに過ぎない

今回行われたのは、おそらく物質が何らかの力の召喚である

しかも、召喚による魔力の揺らぎを発生させない高度なもの・・・

こんなもの科学系の教員には手品にしか見えないだろう

私は思わずいていた

「うちで引き受けよう」

たぶんこの子は今年一番の掘り出し物に違いない

2・02 試験官は見た的な何か（後書き）

そろそろ学校が始まり更新頻度が上がる時期に入ります

というお知らせでした

2・03 入学前夜の何か（前書き）

そなたに感謝を

2・03 入学前夜の何か

私は唯一試験の時に声をあげた男に先導されている。

研究室に連れていき簡単に説明するという事らしい。

試験会場から連れ出され（引っ張り出されたと言った方が正確かもしれない）連れられて（連行されて）いく

「ここだ」

試験会場から徒歩5分、恐らく学園内でもかなり奥の方だ。

そして私は部屋に押し込まれるように中へ入る。

「お前は何をやった？いや、言わなくて良い何をしたのかはわかっている。あれは召喚だろう？だが、一体・・・」

そこまで言った所で私が唾然としているのに気付いたようだ。

「すまない、私はクラウドス・アーベルグ この研究室の主だ。とりあえずその辺の椅子に座って・・・ああ、今本をどかす・・・」

そういつて、本の山に埋まっていた椅子を引きずり出して私に座るようにうながしてくる。

勧められた事だし、とりあえず座る事にしよう。

クラウドスと名乗った男性はデスクらしきもの（本の山になっていて

元が何か判別出来ない)の前に置いてあつた椅子を移動し私と向かい合わせになる位置に座つた。

W

「さて、まずは自己紹介だ。私はクラウス・アーベルグ この研究室の主であり、君の担当教員となる。」

「アメリカ・ロレンスです。えっと。よろしくお願いします。」

「早速で悪いんだが、さつき。」「あ。まず私から言わなければいけない事があります。」「なんだい?」

余程気になる事だつたのだろう。私が話を遮つた事で顔をしかめている。

「どう説明すれば良いのかわかりませんが。私は生きた人間ではありません。」

「生きた人間ではない?それはゾンビとかそういう類の。」「

「あ、いえ、そうでは無くて純粹に魔力で空間に投影しているだけなんです。」「

「空間に投影というと分身のようなものか?」

「イメージはそんな感じなのですが、一応実体を構成してまして。」

「魔法生物?」

「魔法生物。で良いんですかね?一応、私が扱っている人形によ

うな感じで」

「ふむ・・・魔法生物の使い魔か・・・」

「いえ、使い魔は使い魔で別にいるんですが・・・」

「え・・・」

「えっと・・・」

あれ・・・なんか固まってしまったんですが・・・

2・04 一般常識的な何か (前書き)

そなたに感謝を

2・04 一般常識的な何か

「使い魔は1匹までしか持てない・・・」

「え？」

「だから使い魔は1匹までしか持てないんだ・・・」

それはルールか何かだろうか？

「だから、その体は・・・使い魔では無いのだろう、恐らく分身系統の何か・・・だと思う」

「だと思つですか？」

「仕方ないだろう。その魔法を使っているのは私では無く、アメリカ君だ」

「まあ、そうですね」

「だから、今は聞かないから勉強して知識を付けてからどういふものか教えてくれ・・・多分その方が早いだろう。」

「はい、わかりました」

「それはそうと・・・」

何か疲れたようにクラウドはため息をつく

「話を戻すが、さっきの試験でやったのは一体何なんだ？」

「あれはですね、物体の持つ正のエネルギーに対して負のエネルギーを持つものをぶつける事で消滅させるというものでして、その原理はいたって簡単で・・・」

「あー・・・すまない、よくわからないんだが、簡単に説明してくれないか？」

あれ？魔法と科学を扱ってるはずなのにわからないというのは、もしかするとまだその段階まで発展していないのだろうか？

「えっと、例えば何も無い状態を0、石がある状態を1としますよね。石がある1の場所に、特別な-1という物を召喚します。そうすると1-1で差し引き0 つまり何も無い状態になります。」

「つまり、その 1の生物を発見して召喚したという事か？」

「いえ、発見してませんよ？そもそも生物でもありませんし」

「は？発見してないのに召喚・・・特定の生物を発見した上でその生物に対して呼びかけ、呼びかけられた側がそれに応じないと召喚出来ない。それが現在の召喚魔法だ」

「はあ・・・別に指定する時に呼びたい物の体積と密度を指定すれば良いだけだと思いますが・・・」

どうやら、試験の時に私が使った召喚魔法はこの世界ではとても非常識なものだったようです。

2・05 説明的な何か（前書き）

そなたに感謝を

2・05 説明的な何か

「……………」

「どうやら絶句しているようだ・・・」

仕方ない、話を進めよう。

「ところで、今後の説明なんかをお願いしたいんですが」

「そ・・・そうだな」

システム クラウスの フリーズ が 解除されました

「とりあえず、私の指示の元に研究の手伝いと、後は教養系講座を受ける事になる。しかし、私はフィールドワークが多いから・・・そうだな、ちよつと知り合いの教授の所に手伝いに行つて貰うことになるか。こんな所かな、残りは資料の用意が有るから明日また来てくれ。」

「どうやら今日は終わりのようだ、とりあえず今日は帰る事にしようか」

私はクラウドに背を向けて扉へと向かう。

その背に

「ああ、ちよつと待ってくれ・・・」

呼びとめられて私は歩みを止めて振り返る。

「試験の時に使ったあの魔法、自分の知識で説明できるようになつたら説明してくれよ」

なんだ、そんな事が

「はい、わかりました。いつになるかはわかりませんが善処しますね」

「頼むよ、それじゃあまた明日」

「それでは失礼します」

私はそのまま研究室の外へと出て家へと帰る事にした

「あの子は……」

ついさっきの事であるがアメリカ・ロレンスという名の少女が話した使った魔法の断片

幸にも不幸にも私はそれだけで、彼女が何者なのかがわかってしまった

だが、私はそれを誰にも教える気はない

彼女の持つ力を使えば全ての願いがかなえられるだろう

2・06 夜、無音、窓辺的な何か（前書き）

そなたに感謝を

2・06 夜、無音、窓辺的な何か

(さて、まずは簡単にカリキュラムを作らなければいけないな)

クラウドは手際良く現在の能力を把握する為に必要と思われるものをまとめていく。

その作業は夜が明けるまで続けられる事となった。

朝だ、そう朝である。

アメリカは昨日の指示通りに研究室へと向かった。

そして何事もなく研究室の前まで辿りつく

コンコン

とりあえず、扉をノックしてみた・・・反応が無いようだ

ドンドン

強めに叩いてみた・・・反応が無いようだ

ガチャ

反応が無いのにしびれを切らしたのか返事を待たずに研究室無いに

入って行く、そこでアメリカが見たものは！！

「寝ているクラウド先生だったと」

「すまない・・・いや、本当に悪かったと思ってるよ」

ひたすらアメリカに謝り続けるクラウドであった。

昨晚資料をまとめていたであろうクラウドは机の上に伏せるようにして寝ていた。

起こすのも悪いと思い寝かせたまま待つ事1時間・・・

突然、ガバツと起き上がり辺りを見回すクラウド、それをジト目で見るアメリカ

そうそれは偶然ではなく必然だったのだろう、二人の視線が絡み合
いそして・・・

クラウドの延々と続く謝罪が始まったのである

そして、そのまま半時間が過ぎ

「という事で、そろそろカリキュラムについて説明したいんだけど・・・いいかな？」

こうなると担当教員の威厳などという物はもはや無い。

「一応、簡単なテストを受けて貰って、それに応じて学園の方の授業を受けて貰う事になる」

とりあえず、説明が長くなりそうなので簡単に要約しよう

授業は能力別でまとめて行われる（これを共通授業と呼ぶらしい）

それに加えて教員の個別指導が行われる（こちらが授業と呼ばれる）

また、各教員は研究室を持っており、学生は教員の下研究を行う事も出来る。

重要なのがこの3点である

私が受ける共通授業は、魔法学総合1科目、教養（これは、国数社理など普通の授業である）4科目の合計5科目になるらしい。

それと個別に魔法構築と実践をやるらしいが・・・こちらは高度な柔軟性を保ちつつ臨機応変に対応するという事らしい（それを行きあたりばったりと言うんだと私は思うが）

そんなこんなで説明を受け、簡単なテストを受ける・・・

燃え尽きたぜ、真っ白な灰にな・・・

2・06 夜、無音、窓辺的な何か（後書き）

ところどころにネタを入れてますので突っ込み歓迎です。

実際読んでる人はこの作品をどう見てるんでしょうね？

感想をお待ちしてます。

2・07(前書き)

そなたに感謝を

「……これはひどいな」

クラウドが私の記入した用紙を見て言う

その内容は……お察しくださいとおいべきだろうか？

一応、転生前の知識とある程度先天的に得た知識もある。

だが、この世界の現在の文明レベルにおいて私が持っている知識は、はつきり言って異端である

具体的には地動説を唱えたガリレオのようになる可能性が高い

その為に文章化して誤魔化せない証拠を残せないという事だ

「ごめんなさい」

「いや、謝らなくて良い。ところでこの状況には理由があるのか？」

その一言で私はドキッとしてしまう。

クラウドは何となく聞いてみたという感じであったが、その聞いてきた内容はストライク

「あー言わなくて良い、その顔でわかった」

そんなに、表情に出していただけだろうか・・・？

「顔に出てましたか？」

「いや、出てないよ？」

顔に出てないならなぜわかったのだろう

するとクラウドは口元に笑みを浮かべてこう言った

「顔に出てるか気にする時点で訳ありなのはわかるさ」

なるほど、つまり私は引っかけた訳か

「一応、問題無いなら理由を聞かせて貰えないか？私に対してまで全てを隠して行くのは難しいだろう？」

「えっとですね、簡単に言うと証拠は残したくないということかなんというか……」

「ああ、なるほどそうか、それは迂闊だった……じゃあ、口頭で確認しても良いかな？」

こうして、一応学力確認の為には筆記では無く口頭で行われる事となった

2・08(前書き)

そなたに感謝を

「うーん……」

(さて、これはどうすべきか……)

クラウドは悩んでいた。

アメリカにどれくらい知識があるのかを確認したのは良い、だが確認して出てきたものはとんでもないものであった。

出てきたものは技術的に数世代……いや、数十世代は進んでいるであろう知識の数々である。

だが、現時点ではクラウドにも理解する事が出来ない代物……いや、理解出来ないからこそ扱いに悩んでいるというべきだろう。

この知識を公開すれば、間違いなく異端審問を受けるだろう。

この時代の異端審問は『火あぶりにして死ねば有罪』などという大雑把なものであり、かつ親族の連座まであるというものである。

つまり、ばれると確実に処刑されるからばれるリスクは犯せないのだ。

だが、その一方で学園の授業は受けなければいけない。

そんな二律背反の状態にあるのである。

(どうすべきか・・・)

クラウドは答えを見つけ出せずにいた。

「 うーん・・・ 」

口頭での確認のあとクラウドは考え込んでしまった。

(何が問題だったのだろうか？)

人間とは怖いもので、自分がそうだと思い込んでるものには違和感を持たないものである。

アダムとして、またはアメリカとして生きてきた中で、魔法に関して独学以外で学んだ事は無い。

その為、先入観を持たない事からさまざまな発想が出来るという利点がある。

だが、歴史を振り返ると先進的なものや、世の常識と異なる主張は排斥されていく。

ある程度の、知識があれば他との衝突を避け自分の知識を広めてい

くという手段が取れる。

しかし、その知識自体が他との衝突をもたらすものであれば話は別である。

現時点では他と衝突し排斥されるのが目に見えている。しかし、それに本人は気付いていないのだ。

クラウドが悩んでいる事とは知らず

(そういえば、科学系の事はやらないのだろうか?)

などと考えている。

だが、しかし先入観が無い事が突破点になるというのもまた一つの真実である

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2248z/>

転生、そして・・・

2012年1月10日00時46分発行